特集

『熊本地震』からその対策を学ぶ

備えは十分ですか？

4月14日、16日に熊本を襲った最大震度7の熊本地震。
49人もの尊い命が失われ、ピーク時には18万人以上が避難を強いられました。
2ヶ月たった今も、多くの人が厳しい生活を送っています。
もし小林で同規模の地震が起きていたら、
私たちは被害を最小限に食い止めることができるでしょうか。
今月号では、熊本市や嘉島町で被災された人のインタビューから
地震から命を守るための備えについて考えていきます。

震度7の揺れが2回 熊本を襲った大地震

4月14日と16日に震度7を相次いで観測し、熊本県を中心に大きな被害をもたらした「熊本地震」。熊本市では発生して1ヶ月、震度1以上の揺れは1400回を越えており、死者49人、避難所へ避難を強いられた人は最大18万人以上と甚大な被害が発生しています。小林でも、最大震度4を観測しており、決して対岸の火事ではありません。

この地震を受け、市では水などの支援物資や義援金、職員やボランティアの派遣、市営住宅への被災者の受け入れなどの支援を行っています。

地震はいつ起こるかわかりません。だからこそ、いざというときのための知識と備えが大切。今月号では、被災された熊本在住の市出身者や支援のため熊本に行かれた方の話から、地震から命を守るための備えについて考えていきます。

Interview 熊本地震を経験して…

地震のとき一人家にいました 突然のことで恐怖でいっぱい

熊本市在住（市出身）
川野（かわの） 裕貴（ゆうき）さん（21）

最初の大きな地震のとき、私はアパートに一人でいました。突然のことで、どう行動すればいいのか分からず、恐怖と混乱が入り混じっていました。揺れが収まったあと外に出て、夜中の3時ごろまで近くのスーパーの駐車場で過ごしました。

その2日後の本震のときは、同じアパートの友人の家にいました。1回目よりも大きな揺れで、電気が消えました。これ以上大きな地震はないだろうと思っていた中での地震に加え停電。真っ暗で何も見えないことが、さらに怖かったです。友人が近くにいたから冷静になれ、逃げることができましたが、一人でいたらと考えると怖くてたまりません。

いざというときに、冷静でいられるように、どのように行動すればいいか確認することが大切だと学んだ気がします。

命を守ることが最優先

地震が発生。どう行動する？

家に一人のときに地震を経験した川野さんは「冷静でいるために、どのように行動するか確認することが大切」と話しています。ここでは地震が発生したときに命を守るための行動について説明します。

身の安全を確保し 火元を確認しましょう

大規模地震が発生したときは、まず自分の身の安全を確保してください。以前は、「地震が発生したら火を消しましょう」と言われていました。しかし、現在のガスは震度5弱以上を感知すると自動的に火が消えるものが多いです。火を使っていても、慌てて消そうとすると熱湯などが飛び散るなどかえって危険です。揺れが収まってから、火の始末をしましょう。

ドアを開け出口を確保 ブレーカーも落とす

大地震の後には、必ず余震が発生します。余震で転倒、落下する可能性のあるものには近寄らないでください。また、ドアが変形して開かなくなり、室内に閉じ込められることもあります。身の安全を確保できたら、出口を確保しましょう。

家具などの下敷きになった人がいる場合は、協力して助け出してください。

災害用伝言ダイヤルで 自分の安全を伝える

揺れが収まったら、必要なものを取り出し避難します。電力復旧による通電火災を防ぐために、必ず電気のブレーカーを切ってください。余裕があれば、誰かが安否確認に訪れたときのため、玄関に避難先・連絡先を貼り出してください。

身の安全が確保できたら、家族や友人などの安否を確認。自分の無事を伝えるために、災害用伝言ダイヤルなどの安否確認ツールも活用しましょう。

情報収集も大切！「防災・防犯メール」

災害が起こる可能性の高い時は市役所から、メールでお知らせします。ぜひ、登録してください。携帯電話やスマートフォンのカメラ機能で、QRコードを読み取り、本文に「ぼうさい」と入力し、送信すると登録できます。

家庭での地震への備え

万一のため、今できること。

嘉島町で被災した大野さん一家。地震を経験して「命を守るための準備を怠ってはいけないことを感じました」。家族の命を守るために事前にしておくべき備えについて説明します。

年に一度は防災のため家族全員で話し合う

いざというときに備え、家族全員で話し合うことが大切です。

避難所への道順や役割分担、家族ばらばらのときの連絡方法や合流場所など年に1回は家族で会議を行うといいでしょう。

災害時に必要なものの一例。必要な物は人それぞれ、一度確認してみるといいでしょう。

自分たちに必要な防災用品を考えよう

災害に備え、非常用防災袋を用意することも大切です。しかし、さまざまな災害を想定すると、必要なものは数多く、全てを揃えることはなかなかできません。家族会議の中で話し合い、自分たちで何が必要か考えて揃えるようにしてください。そして、防災用品は「普段から使えるもの」を揃え、「普段から使うよう」に心がけましょう。

建物の安全性を確認家具も固定しましょう

大規模地震の犠牲者の多くは、建物の倒壊などによる窒息死や圧死。建物が倒壊すると、ケガをしたり、死んでしまうだけでなく、「火災が発生しやすい」、「道路をふさぎ、救援を妨げる」、「避難生活の長期化」などにもつながります。また、負傷者の30%から50%は、家具類の転倒や食器類の落下が原因です。

命を守るためにも、建物の耐震強度の確認や家具の転倒防止などの対策を行いましょう。

タンスなど大きく倒れやすい家具はつっかえ棒などで固定しましょう。

Interview 熊本地震を経験して…

嘉島町在住（市出身）
大野春輝（おおのはるき）さん（40）
真記（まき）さん（39）

普段子どもと寝ている場所に揺れでタンスが倒れてきた

1回目の地震では、私たちの家に大きな被害はありませんでした。

しかし、万一のために妻と子どもたちは、すぐに外に出られ、ものが倒れてこないリビングで寝るようにしていました。私は、仕事の疲れもあったので、ゆっくりしたいと思い寝室で寝ていました。念のため、タンスが倒れても来ても大丈夫な場所に布団を敷きました。

そして、本震が発生。家の中は家具が倒れ、食器は床に落ちめちゃくちゃでした。そして私が目を覚ますと、体すれすれのところにタンスが倒れていました。

そこは、普段は子どもが寝ている場所です。一歩間違えたら、下敷きになっていたかもしれません。考えるだけでもぞっとします。

命を守るため。準備は怠ってはいけないと痛感しました。

Interview 熊本地震から学ぶ…

防災士ネットワーク
西諸支部支部長
大山政昭（おおやままさあき）さん（49）

地域で訓練や準備をして命を守るための体制を

震災のとき、仕事の関係で熊本にいました。そこで感じたのは、地震が起きても冷静さを保つことの大切さです。私は、防災士の取り組みなどで訓練をしており、地震が起きたときの行動を把握していたので、恐怖はそれほどありませんでした。知識があれば、冷静さを保つことができます。

そのためにも、地域などでの防災訓練やDIG（災害図上訓練）を行うことが重要です。訓練を行うことで、知識がつくだけではなく、隣の家の人と顔見知りになり、いざというときに助け合うことができます。

また今回、地区ごとの防災連絡体制の有無で、救援物資の到着までの時間に差が出たという話も聞きました。命を守るために、地域ごとでの事前の準備や話し合いが必要だと改めて感じました。

地域で協力して防災に取り組む

地震に強いまちを目指して

防災士ネットワークの大山さんは、「地震から命を守るためには、地域での協力も必要」と話しています。ここでは、市が推進しており、地域防災の要でもある「自主防災組織」について説明します。

自分たちの身を守る自主防災組織が重要

災害の規模が大きければ大きいほど、救援活動には時間がかかります。そのため、地域住民自身が「自分たちの身は自分たちで守る」ことに徹しなければなりません。

その要となるのが自主防災組織です。

㊤地区の危険箇所や避難経路などを地図上に記入する、DIG（災害図上訓練）。㊦西小林の自主防災組織が行った防災訓練。

地域で事前に話し合い防災力を高める

自主防災組織は、住民同士で話し合い、いざというときに避難の呼びかけ・誘導、救出・救助、初期消火、避難所の運営などを行うために自主的に組織するものです。普段から、災害対応の役割分担や資機材の確保などに努め、防災訓練などで防災意識を高める活動を行います。

顔の見える関係を築き地震に強いまちへ

「祭の盛り上がる地域は防災力も高い」と言われています。それは、住民同士が顔の見える関係を築いていて、万一のときに協力できるから。災害に強いまちづくりの第一歩は「住民同士の強いつながりを創っていくこと」なのです。

南海トラフ地震など小林でも地震が起きる可能性は十分にあります。いざというときに、自分や家族、友人などの大切な人たちを守るために、地震に備えましょう。